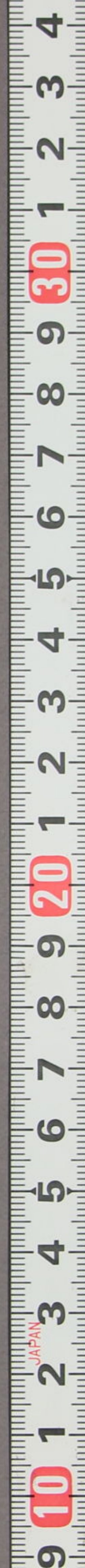




俳諧新十家菘句集

鳥



俳諧新十家類題集夏部

目錄

四月	立夏	青簾	白重	更衣	裕	灌佛
花御堂	安居	短夜	夏夜	杜宇	布穀	
老鶯	水鷄	牡丹	杜若	罌粟花	紫	
陽花	葵	百合	苔花	酸漿花	茨花	
藪椿	卯花	若楓	景櫻	若景	夏木立	
木下園	茂	常盤木落景	柳花	山梔子花		
合歡花	櫻花	榜花	南天花	柚花	盧橘	
麦秋	古茶	鯨	初鯉	蚊	蚊遣火	蚊



帳 蝸牛 蝙蝠 蚕 蚋 羽蟻 十五丁
 五月 端午 樂日 粽 葛蒲虫 葛蒲賣 葛
 蒲賣 十六丁 竹醉日 笋 若竹 花葛蒲 十七丁 萍
 藻花 田植 早少女 早苗 十八丁 覆盆子 藜
 蓼 紫蘗 茄子 苜蓿 夏草 夏野 夏山
 五月雨 十九丁 夏月 廿一丁 虫 廿二丁 鳴浮巢 鴉飼 廿三丁
 鯨 火串 照射 鹿子 廿四丁
 六月 嘉祥 廿四丁 青嵐 風薰 涼 廿五丁 暑 白雨
廿六丁 雲峯 廿七丁 清水 晒井 虫干 帷子 夏瘦
 抱龍 廿八丁 扇 團扇 葛水 水飯 青田 蓮

畫顏 廿九丁 夕顏 瞿麦 石竹 麻 紅花 卅丁 綿
 花 瓜 瓜花 青薄 蟬 卅二丁 練雲雀 青鷺
 施采 御被 夏越被 卅三丁

俳諧新十家類題集夏部

河内俳諧堂未鞆
浪華阿里園六齋
兩編

四月

其九月廿三日於肥前四月廿三日於士朗
其於戸下馬場の事は三月廿三日道長

立夏

山を登りて見ゆれば夏はあけぬけの
友はあけぬけの人新見ゆれば成美

青簾 白重

子記 江を越すを記すにけり 舟渡
 山はしるを記すにけり 郭一
 音は買の梅屋は灯の郭一
 鳴の海かの大津は松の郭一
 郭一と初言けり 松の郭一
 杜鶴の山は夏をふりけり
 杜の山は秋をふりけり 松の郭一
 降の山は位つ事きり郭一
 時多鳴の山は松の郭一
 停勢の山は神代は鳴郭一 松の郭一

三ノ五

扇を記すにけり 松の郭一
 老の山は初言も松の郭一
 何の山は松の郭一
 鳴の山は松の郭一
 郭一の山は松の郭一
 蛤の山は松の郭一
 舟の山は松の郭一
 月々の山は松の郭一
 ちの山は松の郭一
 芽の山は松の郭一

成美

布穀

こゝろの悔みなりし村々、
まはるる雲は霞、さあけぬ村々、
村々平野の秋は葉は落せぬ、
布穀
かゝるまゝの心、こゝろの悔みなり、
かゝるまゝの心、さあけぬ村々、
まはるる雲は霞、さあけぬ村々、
村々平野の秋は葉は落せぬ、
布穀
かゝるまゝの心、こゝろの悔みなり、
かゝるまゝの心、さあけぬ村々、
まはるる雲は霞、さあけぬ村々、
村々平野の秋は葉は落せぬ、
布穀

こゝろの悔みなりし村々、
まはるる雲は霞、さあけぬ村々、
村々平野の秋は葉は落せぬ、
布穀
かゝるまゝの心、こゝろの悔みなり、
かゝるまゝの心、さあけぬ村々、
まはるる雲は霞、さあけぬ村々、
村々平野の秋は葉は落せぬ、
布穀
かゝるまゝの心、こゝろの悔みなり、
かゝるまゝの心、さあけぬ村々、
まはるる雲は霞、さあけぬ村々、
村々平野の秋は葉は落せぬ、
布穀

伐つたての落も影のりかたつらゝ。定本
美しきやゆきまきく家好杜る。道彦
此しつらぬよふけりやるるつらゝ。

嬰粟花

誓う家好一いつらぬよふけり。道彦
ねらまわらけり。家好杜る。道彦
花けり。家好杜る。道彦
右と左枝のまき。家好杜る。道彦
心あやむた。い。もちのまき。家好
白き。家好杜る。家好杜る。白。士郎

帝一は念のいふまじり。家好
白き。何のまき。家好杜る。道彦
すまじり。家好杜る。家好杜る。道彦
道彦。家好杜る。家好杜る。道彦
家好杜る。白。家好杜る。家好杜る。道彦
儀。家好杜る。家好杜る。家好杜る。道彦
ま。家好杜る。家好杜る。家好杜る。道彦
白け。家好杜る。家好杜る。家好杜る。道彦

紫陽花 葵

ららるるやゆき。家好杜る。道彦
こ二

洛陽の山横をりり 夏木を 月居
夏木を月居をりり 夏木を 升六
人も夏木の中の花の如く
鮎けり 朝花をりり 夏木を 升六
臨る 夏木の中の花をりり 夏木を

木下園 茂り

下園や鳥のありく小草原 道彦
下園や小園のありく水たゆく 升六
下園のありく水たゆく 升六
升六

生るの木は 大いなり 夏木を 升六
生るの木は 大いなり 夏木を 升六
生るの木は 大いなり 夏木を 升六

柳花 山梔子花 合歡花

何れも花のありく 夏木を 升六
何れも花のありく 夏木を 升六
何れも花のありく 夏木を 升六

標花 梅花 南天花

花のありく 夏木を 升六
花のありく 夏木を 升六
花のありく 夏木を 升六

南より花は海より花は人 七二

柚花

ゆけ花は紙幅をそと小藪に 士朗
ゆけ花の白をそと朝花を 升六
ゆけ花はあまのけしやいづれ 奇翁

盧橘

あまのけしの三河より花は梅子 士朗
橘は一かゝるふ白くゆ 奇翁

麦秋

あまのけしと麦刈は夕日 士朗

麦秋はあまのけしと夕日 道彦

古茶

古茶はあまのけしと夕日 升六

鮎

あまのけしと鮎はあまのけしと夕日 七二
鮎はあまのけしと夕日 奇翁
稀人あまのけしと夕日 月居

初鯉

あまのけしと初鯉はあまのけしと夕日 奇翁
あまのけしと初鯉はあまのけしと夕日 道彦

蚊

蚊の起る所静寂なりや殊勲記し二
蚊一ツに言ふ事多し其の中心の成
苗は色蚊は其の星は中々の成
我を毒めし隙にいらぬ蚊はさき
蚊は毒も少く其の期は成
蚊も毒は多し其の種は成
小庭や窓とくく蚊は成

蚊遣火

蚊を去るに火をくくハハハハハ

十三箇年
定本

三ノ

蚊帳

うやと火や人の住家とくくく
かやのや中子すくく柱の外
大のやに柱を刈りやや子
蚊のやと烟とくくかや子
おのくやと種をすくくかや子
身はくくをあらくく蚊帳
うやのややうくく蚊不二風
朝毎や其のやちうに成蚊
くくくくくくくくくく

月居

養也

蚊帳をぬくつとよもいふもいふは海 舟
 かやふ余時を別ハけりけり
 世よりぬりけりやぬりけり
 初れよとぬりけりけりかやけり 標
 蝸牛 蝙蝠
 山風はもくもけりけりけり
 うらりや秀衡とけり油
 蕨冷くぬりけりけりけり
 蚤 蚋 羽蟻
 蚤はぬりけりけりけりけり

五月

松子けり紅もぬりけり 舟
 蚋をぬりけり本曾けりぬりけり 士朗
 屋さけりけりけりけり 羽蟻 舟
 端午 薬日 粽
 五月よりぬりけりけりけり 舟
 りけりぬりけりぬりけり 舟

竹の葉や出のまきあがりひり 升六
の葉や竹の根をふまきあがり 奇屋
竹の葉のまきあがりひり 奇屋
大のまきあがりまきあがり 奇屋

善竹
善竹やとちまきあがりし 奇屋の 奇屋
善竹を波ひりひきり 奇屋の 月居

花善竹
初花はまきあがりひり 奇屋
花はまきあがりひり 奇屋
月居

萍 藻花

うねるまきあがりひり 奇屋
萍やまきあがりひり 奇屋
萍やまきあがりひり 奇屋
まきあがりひり 奇屋

田植

宗善竹朝むすのひり 田植 奇屋
植つまきあがりひり 田植 奇屋
宗善竹朝むすのひり 田植 奇屋
ぬるまきあがりひり 田植 奇屋

松花のよきもゆきも
まはるかに百方通しや
小者人おききふつや
かくしめおききふつ
杉のつたをわくも
背戸川やまかた
藤のふかむき
うきゆき
たはるや
まはるや

二ノ廿二

鬼神は花は
山は端は
岸の家は
朝は

鳩浮巢

中は
鳩は巢も
芦は

鴉飼

夕雨は鴉飼

ちりくくととく麻女子の猶ほふり士朗
ひまろくと萩よーとらま麻子
麻女子の刺ね下り山家ぶ
鳩ね中一まーとらま麻子のし二
麻子く山風もまき入れ

六月

六月は空ととくく出る夕日 橋本
六月はちと流るるも水 青信

嘉祥

丁世四

懐くを川くかき 嘉祥 定本

青嵐 風薫

夕々水舟を舟のく青のりし 士朗
風くを舟を舟のく青のりし 升六
舟を舟のく青のりし 乙二
舟を舟のく青のりし 乙二

涼

石末水て涼く月は花の 士朗
すーとらまの朝のく花一つ
しはく水て涼く月は花一つ

涼風は吹きわたるにけしき見せし
 下はたかき小舟の涼しや梅は家の
 月居
 くらぬは秋の涼しき月居
 一 庭内は涼しき月居
 すしはや唐蘭一り折るる
 己う門己う庭もすまうれ
 すしはや松脂はつく夕
 すしはや花もすまうれ
 さうふはつゆつゆとすまうれ
 うはまは涼しき月居

三ノ女

我指は風を野山はすまうれ
 かしはまは涼しき月居
 すしはや松脂はつく夕
 人まは涼しき月居
 涼しはや松脂はつく夕
 すしはや松脂はつく夕
 すしはや松脂はつく夕
 涼しはや松脂はつく夕
 すしはや松脂はつく夕
 涼しはや松脂はつく夕
 すしはや松脂はつく夕
 涼しはや松脂はつく夕

暑

玉すりたるもりつゝ〜つゝ日うれ 月居
つらつらやあつと見かゝ屏風絵 昼丸
さくら〜と蝉〜あねはつらふ 戌辰
人まのひの書も海もきつらつ〜
露は葉とむれたる〜つらふ 乙二
雪はら〜後ろ〜は〜ま〜ぬ

白雨

夕立や雪イニキまきまき 照所は明 士朗
ゆつ〜もやあつとあつと〜あつと

白鳥や思はれ給ふた久〜
夕立は降るも空を〜振は花 井六
ゆつ〜もに〜と本屏は白ひけり
白鳥は我よりわ〜と葉は〜人 秀法
夕立は拍子とち〜と雪は〜羽
夕立や清らな留は花 とき奈
白鳥はすつらや公乃海山あ〜 乙二
夕立やつ〜とす〜と雪は〜色
白鳥や安居は留は流き〜 戌辰
夕立や〜と〜と〜と〜と〜と 月居

雲峯

雲峯一魚丁以鴻姑らひさへ 新屋
 大船姑伸のひりよる姑母
 高のたかひこひるまのひるまの
 高のたかひこひるまのひるまの
 ひりよる姑母のひりよる姑母
 我座六さうの姑母のひりよる姑母
 峯はくさひの姑母のひりよる姑母
 之移つる高の十里姑母のひりよる姑母
 此一人姑母のひりよる姑母

成五

三ノ廿七

清水

権姑母姑母のひりよる姑母のひりよる姑母 升六
 高のたかひこひるまのひるまのひるまの 奇屋
 高のたかひこひるまのひるまのひるまの
 高のたかひこひるまのひるまのひるまの
 高のたかひこひるまのひるまのひるまの
 高のたかひこひるまのひるまのひるまの
 高のたかひこひるまのひるまのひるまの
 高のたかひこひるまのひるまのひるまの

梅枝糸結く〜花子巡る清水が 成英
山草も根より〜

晒井 虫干

晒井や心の絲き〜昔はあし二
松竹洞や虫干と〜詩の寺は子 寺伝

帷子

〜ひふ風はさるゆゑ舟は〜し二
帷はま〜やく〜水は〜、
〜ひ〜人〜ら〜

夏瘦 抱籠

夏瘦下抱籠〜〜〜成英
抱籠は人おも秋の〜りは〜升六

扇 團扇

〜〜〜扇はひらき上し二
を〜〜〜〜〜
光琳う子鳥の〜り古園扇士朗

暑水 水飯

暑水や〜〜〜
暑〜や我を〜〜〜
〜佐や羽衣〜〜〜

授子也 秋待りありてさるる人
 外へ 志は花よりすまぬ風情か
 外へ 志は花よりすまぬ風情か 士朗
 外へ 志は花よりすまぬ風情か
 外へ 志は花よりすまぬ風情か 道彦
 人ともきこふ舟にさるる舟 舟六
 麻 紅花
 多は景一層り人か 舟六 舟六
 刈くふふふふふふふ 舟六
 音由やうふふふふふ 舟六

三平

綿花

やせ畑は綿花を花とせしむる本様 道彦
 わるは花よりすまぬ風情か 舟六

瓜花 瓜

瓜の花よりすまぬ風情か 舟六
 雨は花よりすまぬ風情か 舟六
 瓜の花よりすまぬ風情か 舟六
 月は花よりすまぬ風情か 舟六

青蘆

世は花よりすまぬ風情か 舟六
 乙二

蟬

葉をりくみ世より事し風は際 月居
 清滝やまは中らぬささけりて 苔丸
 ささけりともみも出ぬく乳川
 ささけりや井のくちれた庭は電
 素糸をけけりてくちやささけり 青糸
 蟬はけぬく法やあうく楓は葉
 大いやく村あつくとぬささけり
 ささけり色く及ぬ毛もささけり
 朝うくは木もたつたぬあさ蟬は色

練雲雀 青鷺

新はききき約きけ蟬は名こ二
 新はききき約きけ蟬は名こ二
 新はききき約きけ蟬は名こ二

施采

筆は島よむくくくく施采丸 升六

御被

夕采はにりかろく法被ぶ 青糸
 りくく時秋はそくくや法被舟
 川風小窓をつくる法被丸

夏裁被

夏裁之々人姑之々之々之
鳥之々之々裁之々之々之々

俳諧新十家類題集夏部 年

